

# うたとかたりの対人援助学

## 第2回 戦争と替え唄

鵜野 祐介

### はじめに

2年ほど前から、2014年に亡くなられたフォーク歌手の笠木透さんが集めてこられた替え唄に興味を持ち、ご遺族やご友人から資料をお預かりして整理の作業を進めている。

中心となるのは第2次世界大戦(アジア・太平洋戦争)中に子どもたちによって歌われた替え唄で、例えば次の通り。「ぼくは軍人大嫌い／今に小さくなったなら／おっ母ちゃんに抱かれて／乳のんで／オナカの中へ消えちゃうよ」。元歌は「ぼくは軍人大好きよ／今に大きくなったなら／勲章つけて剣さげて／お馬にのって／ハイドウドウ」。言論の自由が許されなかったあの時代に、子どもたちはよくこんな唄を歌っていたなあと感じる。けれどもあの時代だからこそ、こんな唄を歌わずにはいられなかったのだという気がする。

今回は戦争中の子どもの替え唄を通して、人はなぜうた(唄・歌)を歌うのか考えてみたい。

### 「教育勅語」のパロディ

昨今、メディアを賑わせている某学校法人が経営する幼稚園で、園児たちに暗唱させていたことで一躍脚光を浴びた「教育勅語」。教育の方針に関する明治天皇のお言葉として1890年に発表され、特に1930年代以降1945年8月15日の敗戦の日まで、当時植民地下にあった

韓国・朝鮮や台湾や満洲も含めて、「日本国」の子どもたちにとって一番「ありがたく」「おっかない」言葉であった。

中学の面接試験ではこれを暗記しているかどうかを試され、学校での式典には必ず校長先生が奉読するのを、全員頭を垂れて拝聴させられた。その「替え唄」というよりメロディはないので「替え文句」があった。「朕<sup>ちん</sup>おもわず屁をこいて<sup>なんじ</sup>汝臣民臭かろう鼻をつまんで我慢せよ」。

「朕」とは天皇の一人称だから、「私-天皇はうっかり屁をこいてしまった。あなたたち臣民は臭いだろう。鼻をつまんで我慢しなさい」となる。こんな内容の言葉を、もしも学校の先生や憲兵に聞かれたら、ビンタや拳骨ではとてもすまないはずだ。親にも厳重注意が下されただろう。そんな「危険」も顧みず、どうやら全国的に唱えられていたようなのだ。いったい誰が最初に唱え始め、どんなふうにして伝わっていったのだろうか？

### 「海にかば」と毒ガス・サリン

戦争中、「第二の国歌」とも呼ばれていた「海ゆかば」は、万葉歌人大伴家持の作と伝えられる。「大君」(=天皇)への命を賭しての忠誠を誓う内容の歌詞に、キリスト教徒の信時潔が作曲した、讃美歌のようにも聞こえる荘重で厳粛

な歌である。「海行かば 水漬く 屍 / 山行かば 草生す 屍 / 大君の辺にこそ死なめ / かへりみはせじ」—(現代語訳)「海を行けば、水に漬かった屍となり、山を行けば、草の生す屍となって、天皇陛下のお足元にこそ死のう。後ろを振り返ることはしない」。これが次のように替えられる。「海にカバ / ミミズク馬鹿ね / 山にカバ / 草むす馬鹿ね / おお、君の / 屍にこそ死なめ / かえり見はせじ」。海にも、そして何故か山にもカバがいる。そしてここでも「屍」がポイントで、君(=友だち?)の屍は殺傷能力を持つ毒ガス・サリンほど強力なのだ。

#### 「露営の歌」と替え唄作りの鉄則

元歌は軍歌「露営の歌」。「勝って来るぞと勇ましく / 誓って国を出たからは / 手柄たてずに死なろうか / 進軍ラッパ聴くたびに / 脛にかぶ旗の波」⇒替え唄その1「負けて来るぞと情なく / しょぼしょぼ国を出たからは / 手柄などとはおぼつかない / チャルメルラッパ聞くたびに / 脛にチラチラ敵の剣」、替え唄その2「勝って来るぞと勇ましく / 誓って国を出たからは / 手柄たてずに支那料理 / 進軍ラッパ聞くたびに / まぶたに浮かぶ支那料理」。笠木さんは替え唄作りの鉄則として、「1. さかさまにする」<反転>、「2. 同じ言葉を繰り返す」<反復>を挙げておられるが、ぴたりとあてはまる。

#### 「一月一日」と乱痴気騒ぎ

戦時中は、「四大節」と言って年に4回、祝日に全校児童が登校して講堂に集合し、厳粛な祝典が営まれた。その一つ、1月1日の「四方拜」で必ず歌われたのがこの歌。「年の始めの例とて / 終わりになき世のめでたさを / 松竹たてて門ごとに / 祝う今日こそ楽しけれ」。今日でも正月TV番組の中でよく耳にするこの歌も、ダジャ

レ混じりのバカバカしい大騒動に変身した。「トーフの始めは豆である / おわり名古屋の大地震 / 松竹ひっくり返して大さわぎ / イモを食うこそ屁が出るぞ」。元歌が歌われた状況が厳粛な場であればこそ、それを<反転>させた乱痴気騒ぎなのだろう。そんな中、食糧不足でサツマ芋しか食べられない不満もしっかり吐き出している。そしてやっぱり「屁」が出てくる。

#### 「夕焼小焼」とリアルな現実

元歌は大正期童謡運動の中で生まれた純粹無垢な「童心」の世界。「夕焼小焼で日が暮れて / 山のお寺の鐘が鳴る / お手手つないで皆帰る / 烏と一緒に帰りましょう」。ところが1942年に金属回収令が出され、お寺の鐘も供出させられることになって、山のお寺の鐘は鳴らなくなる。「夕焼小焼で日が暮れない / 山のお寺の鐘鳴らない / 戦争なかなか終わらない / 烏もお家へ帰れない」。<反転>の鉄則を用いた結果、リアルな現実が浮かび上がってしまったわけである。

そして、「お家へ帰れない」と歌う時、子どもたちが思い浮かべるのは烏だけでなく、戦争に行ったお父さんやお兄さんの顔、さらには疎開先から実家に戻れない自分自身のことでもあったに違いない。

#### 「湖畔の宿」から「名誉の戦死」へ

元歌は1940年に発売された高峰三枝子の歌う哀愁漂う流行歌。「山の寂しい湖に / ひとり来たのも悲しい心 / 胸の痛みに堪えかねて / 昨日の夢と焚きすてる / 古い手紙のうす煙り」—これがなぜか、名誉の戦死を遂げて遺骨の入っていない白木の箱で帰還した「蛸八」や「ブタの子」の話に替えられた。「昨日召された蛸八は / 弾丸に当たって名誉の戦死 / 蛸の遺

骨はかえらない／骨がないからかえれない／  
蛸のカアチャン寂しかる」「昨日生れたブタの  
子が／ハチに刺されて名誉の戦死／ブタの遺  
骨はいつ帰る／昨日の夜の朝帰る／ブタの母  
ちゃん悲しかる」。

この替え唄について笠木さんは次のように解  
説している。「ぼくら少国民は、この静かにヒット  
していた恋の歌を、戦争の悲惨さをうたう歌に  
してしまったのですから、さすがです。権力は元  
歌は禁止したものの、この替え歌が口から口へひ  
ろがっていくことだけは止めようがなかったの  
です。戦争も後半になると、ぼくらは、日の丸を  
持って、駅へ遺骨をむかえに行くことが多くな  
りました。元気いっぱい「行ってまいります」と  
出征していった兵隊さんが、白い布につつまれ  
た、小さな白木の箱となって帰ってくるのです。  
そのうち、白木の箱には、石ころがひとつ入っ  
ただけだそうな、とか、何も入っていなか  
ったらしい、といったウワサ話が聞こえてきまし  
た。そんな時代背景が、どこかに影響をあたえ、  
こんな替え歌になったのでしょうか」(笠木透『昨日  
生れたブタの子が 戦争中の子どものうた』  
音楽センター1995:19)。

#### 戦争と子どもの替え唄

この他にもたくさん<sup>(ママ)</sup>の替え唄が戦争中に子ども  
たちによって歌われていた。それらを丹念に  
集めて編集する作業を通して、笠木さんは次の  
ような考えを持つようになったという。

「ぼくらは、あの暗黒の時代に、これらの替え歌  
を歌うことで、自分をはげまし、心をいやして  
いたのです。戦争中の替え歌など、低俗で下品で、  
単純で軟弱で、こんなものは芸術ではない、と  
おっしゃる人もいることでしょう。でも、あの時  
代、ぼくらにとってこれがうたであり、これが芸  
術だったのです」(同 22 頁)。

「遊びで作った替え歌が、結果としてではあつ  
ても、あの戦争に生れた替え歌の中でも、もっと  
も次元の高い反戦歌となってしまったことに、  
ぼくは大きな拍手を送りたい」(同 15 頁)。

#### おわりに 一人はなぜ歌うのか

戦後になっても替え唄は歌われてきた。「田  
舎のじっちゃん、ばっちゃん／芋食って屁こい  
て／パンツに穴あいて大騒ぎ／ジジイは殺さ  
れババアは自殺／残ったパンツは海遊館」(元  
歌は「アルプス一万尺」)。「戦争しようと町まで  
出かけたら／戦車を忘れて三輪車で突撃／相  
手はマシンガン／こっちは水鉄砲／ルールルル  
ルー／結局負けちゃった」(元歌は「サザエさ  
ん」)のエンディング曲、1990 年代の湾岸戦争の  
頃に歌われたという)。

いつの時代にも子どもたちは替え唄を歌っ  
てきた。そしてそこには<死・いのち><屁・う  
んち><食べ物><性器・セックス><殺人・暴  
力><悪><アイドル・キャラクター>などが好  
んで歌われた。それは「子どもはかくあるべし」  
という親や教師や大人社会の権力行使に対す  
る、無意識のうちの抵抗であり、逆襲であり、自  
由の主張だったのではないか。

「人はなぜ歌うのか」に対する答えがここ  
にある気がする。自分は自分らしくありたいと表  
現すること。それが歌うということの本質だろ  
う。そしてそこにユーモア(笑い)を加えるところ  
が、子どもの才覚であり、知恵だと思われる。

大人たちに押しつけられた「正義」に対して  
自由にもものが言えない時代だった戦時中、  
数々の傑作替え唄が生まれた。再びそんな空  
気が忍び寄っている気がする今、子どもたちは  
どんな替え唄を歌っているのだろうか。そして  
また、シリアやイラクや北朝鮮の子どもたちも  
替え唄を歌っているのか、ぜひ知りたい。